井伏鱒二著

川釣り

岩波新書

103

井伏鱒二著

川釣り

岩波新書

103

井伏鱒二

1898年広島に生まれる
早稲田大学文科中退
現在―文筆業
著書―小説集「井伏鱒二選集」
「本日休診」他

川　釣　り　　岩波新書(青版) 103

1952年6月26日　第1刷発行
1975年1月30日　第25刷発行

著　者　井伏鱒二

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行者　岩波雄二郎

東京都板橋区高島平 9-13-7
印刷者　山田博

発行所　東京都千代田区一ツ橋 2-5-5　株式会社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　三陽社印刷・永井製本

まへがき

私は釣りが好きだが釣りの技術に拙劣である。したがつて、この本に集めた文章にも、釣技に關することは何も云つてない。たいていは釣りに行きたくつても行けないやうなとき、自分の釣場を思ひ出しながら書いた文章である。私の尊敬する友人で海釣りの達人は、「十年釣りをして三行書け。」と云つた。もしこの金言を遵奉すれば、私は十數年前から釣りをはじめたので數行しか書けないことになる。わづか數行の文章で釣りに關することを書くとすれば、まづ釣りの心得でも書くよりほかはないだらう。しかし私は金言を發表できるほどの釣師ではない。私の釣りの師匠である佐藤垢石は「山川草木に溶けこめ。」と云つた。河津川の川端さんといふ老釣師は「お前さん、川に喰らひつかなくちゃ。」と教へてくれた。笛吹川の矢崎さんといふ練達者は、「もつと眞面目に釣らなくつちやいけねえよ。」と云つた。下部川のヤマメ床といふ練達者は「そんな、せかせかすることぢゃ駄目。」と云つた。いづれも私の心境の至らなさを懲らしめた言葉である。私は山川草木に分け入る精神に緣遠い。

昔の或る俳人には「旅の心得」といふ偽書があるが、旅の心得も釣りの心得に通ずるものがあるだらう。やはりその偽書にも「山川舊跡、したしく尋入るべし。……航錢茶代、忘るべからず。」と云つてある。

――この本には、例外の二つを除くほか、みんな戰後に書いた釣りに關する隨筆や感想や紀行文などを集めることにした。例外の一つである「釣魚記」は、釣りについて私の初めて書いた文章である。例外のいま一つ「掛け持ち」は、或る釣宿の番頭の身の上を可成り脚色して扱つた短篇小説である。この二つとも、私が釣りを始めて間もないころ、いまから十數年前に書いた。確たる年月は忘れたが、東京の釣具屋で賣る草鞋が、五錢から一躍して十何錢に値上りした當時のことであつた。だが、大してまだ悪くない時代であつたやうに考へる。あのころの釣場々々に、私はいまだに愛着の念を持つてゐる。

昭和二十七年春

井伏鱒二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

溪流……一
釣魚記……二
釣魚餘談……三
釣魚雜記……一九
ワサビ盗人……二五
雨河内川……四〇
手習草子……五六
不漁雜記……五六
二月二十日記……五八
樟腦の粉……六〇

恐るべき風月老人……六五
冬の釣り……六七
鮭……七〇
鯰釣り……七二
疎開者不漁……七四
私の膝小僧……七九
湯河原沖……八七
河川情況……九三
白　毛……九七
掛け持ち……一一七
片棒かつぎ……一四〇
グダリ沼……一七一

渓流

今日はさつぱり釣れない。
をとりの鮎も
一ぴき曳きころし
一ぴきは逃がした。

でも釣りたい。
絲のさきに
石ころをむすびつけ
かうして釣る眞似をする。

ごつごつ　ごろごろ
まさに手應へがある。
カハセミのやつ
羨ましさうに見てゐるぞ。

釣魚記

東京には、釣天狗の人が三十萬人もゐるといふことだが、釣りの好きな人は案外せつかちで好色だといふことである。しかし、さういふ濡れぎぬを着せられても私は釣りがきらひだとは云ひきれない。但し、私が釣りを始めたのは昨年からである。べつにせつかちな性分になつたとも何とも思はないが、釣りに出かけ河原で絲をつないだり魚を釣り落したりしたときには相當じれつたい氣持になる。せつかちな性分に充ち足りるやうな刺戟を與へるには、自分をじれつたい立場に置くのが一ばん手近かな方法である。せつかちな人間は自分のせつかちな氣持を刺戟して、その刺戟感をたのしんでゐるかもわからない。

私に釣りの手ほどきをしてくれたのは、佐藤垢石老である。先年、私は增富の谿谷や相模川に垢石老に連れられて出かけたが、その頃は釣りをしてゐる自分はこんなことをしてはゐられないといふ氣持になつた。それは聊か物悲しい氣持であつた。ところが去年の七月、久

しぶりに垢石老に連れられて富士川の身延の川しもに行き、垢石指導のもとに九寸のアユを數ひき友釣りで釣り上げた。垢石は私のことを大いに見込みがあると云つておだて上げ、そんなことから私は他愛なく釣り好きになつてしまつた。

垢石老は先づ釣竿の持ちかたから川に向ふ姿勢、足の運びかたやアユを釣り上げるメソッドについて私に教授した。富士川の滔々とながれる岸邊に立ち、お手本を示しながら教授してくれたのである。垢石は左のごとき説法をしてくれた。

「友釣りの方法はいろいろある。しかし俺のいま云つた方法は、俺の四十年間の釣りの經驗からすると、一ばんすぐれたものだといへるやうだ。お前もいまこの釣りかたで、苦もなく一ぴき釣りあげた。ところが來年あたりになつてすこし經驗を積んで來ると、お前は自分で工夫を加へて釣りかたを變へてみたくなる。それからまた次の年になると、また自分の工夫を加へたくなる。さうするとだんだん釣れなくなつて來る。三年目か四年目ぐらゐにはまるでへたくそみたいになる。スランプだ。まるで駄目だ。それでまた自分で工夫しながら釣つてゐると、十年目ころには自分のその十年間の經驗で、いま俺の教へた通りの方法で釣りたくなるやうに逆戻りする。つまり初めに習つた原則に歸つて來て、結局は自分でその原則を發見したほどの自信が生れて來る。譬へていへば、それは文章道の修行と同じことだ。文

章道でもいろいろ工夫してみるだらうが、結局は松尾芭蕉が立派だといふところに歸つて來る。」

私は垢石のその說法をききながら、富士川のながれを目の前にひかへ、ただ感慨無量になるばかりであつた。

そのとき垢石の連れて來てゐた殖田さんといふ人も、いま垢石翁の云つたことは實際名言であると云つた。殖田さんという人は水產講習所の先生で、アユの食べる水垢の研究では日本の權威者ださうである。この人は私に水垢について教授してくれた。專門的な話は私にはよくわからないが、水垢は硅藻なのださうである。一般に水垢がくさつてゐると云ふのは、その硅藻の花が散つて枯れてゐることださうである。殖田さんは水垢のついた小石を一つ拾ひとつて、水垢がこんな色をしてゐるのはもう花が散つてゐるのだと云つた。

垢石は私が一ぴき釣る間に三びき釣り上げて、しかも板についた姿で五間の釣竿を輕々と扱つてゐた。その恰好を私は眞似ようとしたが、釣竿を持つ私の姿は自分ながら無恰好であると認めなくてはならなかつた。私はそれを自分の釣竿が安物で重いためだと考へたが、垢石は釣りそのものに對する私の魂魄が高邁でないためだと批評した。

「釣竿を持つには、先づ邪念があつてはいけない。自分は山川草木の一部分であれと念じ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なくてはいけない。」

垢石の云ふところは可成り嚴しいのである。

その後、私は獨りで伊豆の河津川に行き、谷津の南豆莊といふ宿に泊つて半月ちかく落アユを釣つた。朝早くラジオ體操の放送をききながら釣ることもあるし、調子のいいときには徹夜をして釣ることもあつた。瀨の兩側に十人近くの人が列をつくり、肘と肘とが觸れ合ふやうに間近く竝んで釣るのである。したがつて一人が釣り上げると、その竿の動きにつれ他の人も竿を立てなくてはいけなくなる。橋の上から見てゐると、何本もの竿が將棋倒しのやうに臥たり起きたりして何か遊戯でもしてゐるやうな眺めである。初めのうち私がその川しもの橋の下で釣つてゐると、カハセミのをぢさんといふ釣り上手の漁師が私の釣つてゐるところに來てこんなことを云つた。

「お前さん、いまごろそんな場所にアユはゐない。アユはいま瀨についてゐる。あそこの瀨で、みんなと竝んで釣らなくちやいけない。」

そこで私は瀨のところに行つてみんなと竝んで釣つた。それ以來、このカハセミのをぢさんといふ漁師と私と知り合ひになつた。囮もこの人から分けてもらふやうになつた。

この人は土地の釣師のうち、第一人者をもつて自他ともに許してゐるアユ漁の漁師である。

晝間、瀬づきのアユを釣るのに平氣で雄の囮をつかつて釣りあげる。しかしこのカハセミのおやぢは自分の腕前を自慢しないかはり、なかなか他人の腕前を讃めないのである。

或る日、朝早く私が顏を洗ふ前に橋の上に行つてみると、カハセミのおやぢも橋の上に立つて川を眺めてゐた。瀬の兩側に十人ぐらゐの釣師が竝んで釣つてゐた。みんな調子よく釣りあげてゐた。私はその一人一人の釣る樣子を見較べて「おやぢさん、あそこの右から三人目の人が上手らしいぢやないか。」と持ちかけると「なあに、あれはこの川筋では二番目に上手だ。」と云つた。

「では、あそこの左から二人目の人が上手なやうだ。」と云ふと「なあに、あれはこの川筋では三番目に上手だ。」と云つた。それでは一番上手は誰かときくと「なあに、あそこには一番上手はゐない。一番上手といふものは、そんなに滅多にゐるものではない。」と話を外らした。

このおやぢは或るとき私にこんなことを云つた。

「アユを釣るにはお前さん、川に喰らひつかなくちやいけねえ。」

これは富士川でいつか垢石の云つた「山川草木」の說と根本は同じである。

私はたびたびカハセミのおやぢから囮のアユを分けてもらつた。一ぴき十錢でいいといふ

から二十錢出すと、大きなのを二ひき分けてくれ「ちよつと、この俺の釣竿を持つてくれ。」と云ふ。それはいつものおきまりで、彼は囮のついた釣竿を私に持たせ、用足しにでも行く風をして川からあがつて町の方に行く。その間、私は彼の釣竿で釣つてゐるが、暫くすると何くはぬ顔で歸つて來る。そして「やあ有難う。」と云つて釣竿を私から受取るが、必ず彼は酒くさい息を吐いてゐる。囮の代金でちよつと一ぱい燒酎を引つかけて來るのである。

去年、私が谷津から歸るとき、カハセミのおやぢは「來年の解禁には來いよ。」と云つた。今年、解禁の日に私は谷津に行き、それから七月になつてまた出かけた。ところが七月十二日の夜更けに南伊豆を襲つた豪雨のため、私の泊つてゐた南豆莊といふ宿が水害に遭つた。

私はその夜一時ごろ寢て、間もなく「水だ水だ。」と叫ぶ聲で目をさました。電氣はまだついてゐた。とび起きると疊はもう水に浮いてゐて、私の踏んだ疊は他の浮いてゐる疊の下に滑り込んだ。廊下にとび出すと、無我夢中で二階に駈けあがつた。家はすつかり濁水にとりかこまれ、家の横手の高さ七尺ばかりの石垣と家の境界に、急流をつくつて水がながれてゐた。宿の人もお客も二階に逃げて來た。人數は合計十一人であつた。お客は、歸還兵、慶大生、龜井君、太宰君、奥さん、私の六人である。宿の人は、おかみさん、娘、もう一人の娘、中學卒業の子供、女中の五人である。

宿の人は蒲團や着物や貯金帳を二階に運んで來た。それが物狂ほしい忙しさと騒ぎのうちに行はれた。おそろしい音で雨が降り、庭を埋めてゐる濁水は刻一刻に增えてゐた。私は階下の私の寢てゐた部屋に駈けおりて行き、浴衣の上に上着をきて、ポケットに時計と財布と萬年筆を入れて二階にあがつて來た。

二階の部屋に泊つてゐた慶大生と歸還兵は、宿の人の荷物を運ぶのを手傳つてゐた。もう一人、突きあたりの部屋に泊つてゐた龜井君は、初め私が二階にあがつて行き「水だ水だ。」と云つたとき目をさましたが、彼は宿の人の積み上げた蒲團の上に泰然として腰をかけてゐた。太宰君は「驚くですね、驚くですね。」と云ひながら鞄を抱へて二階にあがつて來た。彼はこんな場合に見苦しい死にかたをしてはいけないと呟いてゐたが、ぢつとしてはゐられないと見え、宿の人の荷物運びの手傳ひをした。彼は階段に純日本米の俵が一俵ひつかかつてゐるのを引き上げようとして、蟻が低きより高きへ餌を引き上げるやうにして俵を引張つてゐた。たうてい駄目な努力のやうに見受けたが、私が臺所から南京米の袋をかついで來たときには、彼はもう二階の廊下までその俵を引き上げてゐた。

水は裏手から表口に向かつて流れ、臺所も玄關も水が膝まで屆くやうになつた。臺所の床板は床下を流れ去る水の勢ひで押し上げられ、板の剝ぎとられた穴が出來て危險であつた。

水のなかを足の爪さきで探りながら歩かなくてはいけないのである。不圖、女中がその穴に陥ち込んだ。床下に引き込まれるかと思はれたが、彼女は奇蹟的に穴から這ひ出して來た。きつと床下の水勢の方向が變つて助かつたにちがひない。試しに穴に棒を入れてみると、床下の水はよぢれるやうに流れ、水勢は絶えず變化してゐるやうであつた。

みんな二階に集合して、脱出するか籠城するかについて會議した。脱出する説を出したのは私だけで、他はみな夜が明けるのを待たうと云つた。

それでも水はだんだんに增えて來た。時計を見るとまだ三時半であつた。夜が明けるのが待ち遠しかつた。たうとう脱出しようといふことに一決し、十一人が細びきにつながつて階下におりて行き、私の寢てゐた部屋から外に出ることにした。窓の雨戸をあけると、いきなり瀧のやうに外の水が流れ込んだ。私は素早く戸をしめた。おかみさんが手をひろげて「みなさん、諦めませう。」と絶望の聲を出した。

私たちはまた二階に駈けあがつた。おかみさんは後から二階にあがつて來て、いま郵便局に電話をかけて助け船を賴んだと云つた。いま直ぐ來てくれると云つたさうであるが、そんなのは郵便局で云ふ氣休めである。それに郵便局では、いま三宅島が爆發して東京の郵便局でも今晩は大變多忙のやうだと云つたさうである。大島の方角では盛んに稻妻が光つてゐ

た。私は伊豆七島全部が爆發したのではないだらうかと考へた。

今年の春、三宅島神着村の淺沼悅太郎氏から、畑に植ゑつけた芋がみんな腐つて芋燒酎の原料が駄目になつたと手紙で云つて來た。そんなに植ゑつけた芋など腐るやうな年は、噴火のおそれがあるから用心したまへと私は淺沼君に通知しておいたところ、果してその通りの結果になつた。三宅島の噴火は記錄に殘つてゐるだけでも今度で十三回目である。その都度前もつて冬期に櫻の花が咲いたり植ゑつけた芋が腐つたりして、それはどこの火山島でも噴火の前ぶれは同じやうな兆候を示してゐる。

私は洪水騷ぎのなかで、天變地異のおそろしさを二重に感じてゐた。二階の廂から物干竿で計つてみると、水は七尺弱の深さであつた。夜がしらじらと明けるころ水は次第に減つて行き、崩れた土塀の根の紫陽花が水面に花をもたげて搖れてゐた。それがしらじら明けの薄ら明りのなかに、ぽつかり白く見えてゐた。

水の引き去つた後は慘めであつた。湯殿も物置も物干臺もすつかりなくなつて、私の寢てゐた部屋には床の間に香爐が一つ殘つてゐるだけであつた。私の魚籠や釣竿やズボンや靴なども流れてしまつた。

後で近所の人が、川しもの橋に引つかかつてゐた私の釣竿を屆けて來てくれたが、安物の

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com